園芸サービス業

「頼んで楽しかった」
若手造園技能士が顧客と共に創る庭
7-1　有限会社　ジーブレーン

Think Global, Act Local な造園企業

福岡県北九州市にある有限会社ジーブレーンは造園・土木工事などを主な業務とする企業である。「初めて会う人からはシステムの会社かと勘違いされてしまうんですよ。」とインタビューに応えてくれたのは社長の石井隆一郎氏。

石井氏によれば社名の「ジー」は「グリーン（緑）」、「ガーデン（庭）」といった企業のビジネス内容や、「グローバル（今の立ち位置にとらわれない広い視点を持つ）」、「グレード（格調高い仕事をする）」、「グループ（仲間意識を持った企業文化を醸成する）」といった企業理念までを凝縮した一文字である。また、そういった才能を伸ばすという意味で「ブレーン」が続く。

仕事力をつけるためには必須の技能士

造園とはその言葉の通り、「庭を作る」仕事である。庭といえば、京都などの神社仏閣の周囲に配置された庭が思い浮かぶが、規模の違いこそあれ、実際にそれを作っていくのが仕事である。また、城郭建築の土台に積み上げられた石垣などの造成にも携わる。

「石垣を眺めると、岩が隙間なく積まれていますよね。あれも石のどの面を表面に持ってくるのか、他の石との接合面にするのか、といったことを判断しながら仕事をしていく必要があります。石垣に限らず、庭というのは自然の素材を組み合わせて作っていくものですから、実際に素材に向かい合わないと具体的な作業に取り掛かることができません。かといって、時間は限られている。その場での『何を選んで、何を使わないか』の取捨選択、判断力がとても重要な仕事です。」

そんな造園の仕事をしていくに当たっての造園技能士とはどのような位置付けなのだろうか。

「技能検定は幅広い知識を身に付けるための１つの機会だと思っています。もちろん、技能検定で問われる内容だけで仕事ができるわけではありませんが、仕事をしていく上での『総合力』を付けるためには必要なものですね。」

石井社長

事業受注において重要性が増す技能士

「公共の仕事をやる際には技能士であることが評価の対象になります。」と有用性を語る石井社長。ただ、公共の仕事を受注する際には、１級造園技能士よりも２級の施工管理士の方が高い評価につながることもある。その場合、経営判断的には先に２級施工管理士を取得した方が良いということになる。「将来的には、造園の際に造園技能士が必要と言うところも出てくると思います。そうすれば、造園技能士の存在もさらに重要になってくるのではないでしょうか。」

また、石井社長は管理職にとっても造園技能士が必要と説く。「管理士は保有しているが、造園技能士ではないというのでは、現場との意思疎通が図れず、現場はついてこないでしょう。現場の話を聞くとか、感性を培うことが重要だと思います。その時に、現場施工経験のある造園技能士が重要になってくると思います。」

学歴ではなく学ぶ力を

「職人だから特定の業務だけをしていればよい、というわけではないと思います。学歴が無くても学力は身に付きます。そういう『学ぶ力』をジーブレーンで働く人には身に付けて欲しいですね。例えば、技術だけではなく、相手にものを聞くときのコミュニケーションや姿勢、態度を学んで欲しい。造園業は左官や大工仕事の要素も必要な仕事です。そういう時には必ず左官の職人さんや大工さんに学ぶ必要がある。ただ自分の仕事の腕を磨くだけではそれができません。」と人材育成について話す石井社長に、今後の造園技能士の姿について伺った。

「今後の技能士には提案する力が必要になってくると思います。昔は公共の仕事でも図面通りに作っていればよかった。今は図面通り作ってもミスが見つかれば、『なぜ指摘してくれなかったのか』と言われる。図面を元により良いものを作っていける技能士が求められる時代がきているのではないでしょうか。」

有限会社　ジーブレーン

- 業種：園芸サービス業
- 住所：福岡県北九州市
- 代表者：石井隆一郎
- 設立　平成8年
- 従業員　10名
- 技能士　3名

技能士へのインタビュー

石井　志郎氏　（22 歳）　2 級造園技能士

16 歳で放り込まれた作庭の世界

「15 歳頃までは庭のことは殆ど頭に無かったんですよ。他の庭を見ても特に感じることもありませんでした。」と話すのは 2 級造園技能士である石井志郎氏。同氏は若くして 16 歳で第 40 回技能五輪全国大会（造園）に出場、21 歳の時に出場した第 46 回技能五輪全国大会で金賞を獲得し、技能五輪国際大会に出場、海外で開催された 2009 年の技能五輪国際大会の造園競技で初めて日本人として入賞するという快挙を成し遂げた。「22 歳でこんなことをしているとは思いませんでした。」と自らを振り返る石井氏は中学校を卒業して造園の世界に足を踏み入れた。

最年少の技能五輪全国大会参加

全国大会への最初の挑戦は唐突にやってきた。中学を卒業して間もない石井氏に、やってみないかというオファーがあり、大会までの 4 ヶ月間、会社の仕事が終わってからの時間を使って大会の準備を行ったという。

「右も左も分からないところからのスタートでした。道具の名前、樹木の種類を覚えるところから始めなければいけなかったんですよ。」と当時を振り返る石井氏。

全国大会は選手 1 人で出場する形式と 2 人の選手がチームを組んで出場する形式とが隔年で開催される。石井氏が初出場した第 40 回大会はチーム参加の大会で、19 チームが出場した。その中で石井氏の 16 歳という年齢は過去最年少だったという。しかし石井氏の活躍の影響下、最近では高校生程度の年齢の出場者も現われてきたとのことである。実際の大会では 2 日間で 11 時間の課題をこなす。

全国大会では、「時間内に作り上げられるか」、「図面通りの寸法に作れるか」、「図面を作成した人の気持ちをどれだけ汲めるか」といったところが評価のポイントになる。特に、図面を作成した人の気持ちを考えて庭を作る、という点も評価のポイントになるのが造園の難しさであると石井氏は話す。もっとも、重要なところは他にもあるようだ。「楽しむことを忘れず、知恵を出し合って協力しながら作業を進めていくことも大切なことだと思います。」

課題となった庭

「自分たちの庭を作り上げる」ことへのこだわり

数度の全国大会への出場の後、第 46 回の全国大会で石井氏は金賞を獲得、国際大会に挑戦するための切符を手にする。しかし、国際大会と日本の全国大会では大きなギャップがあったと石井氏は振り返る。

「国際大会と全国大会の違うところは、課題の変更が頻繁にあることですね。初めに水平面を作るように指示されていたところが、途中から勾配をつけるようにと改められたりといったことが結構あるのです。そうすると、その都度勾配の寸法を計算したりする必要が出てきます。その場での対応力が問われますが、会場で使われている言葉や計測単位は全て外国語。通訳をつけなければならないので余計に時間がかかってしまうんです。」

また、国際大会と全国大会との評価のポイントの違いも石井氏のチームにとっての大きな課題となった。「課題で出された庭が完成しなくても優勝できるのが国際大会の特徴だと思います。そこには評価ポイントに的を絞った作庭をすれば、仕上がらなくてもよいという考え方があると思います。」実際に、課題終了時点で作庭を終え、作品の掃除まで終えて顧客に引き渡せる状態にまで仕上げられたのは日本チームのみだったという声もある。

結果的に敢闘賞だったが、作品として完成させようという方針は選手 2 人の納得の上での決断だった。「後悔はしてません。やりきれましたし。」海外で開催される国際大会で日本チームが賞を取ったのはこの時が初めてだった。

大会の面白さは、まずは作品を作った時の達成感。同年齢の世代の職人と同じ課題をこなす、話す、友達になれることである。

自分しか作れない庭を求めて

国際大会に出られたことは、石井氏の今後の職人としてのキャリアを歩む上で大きなインパクトがあったようだ。「国際大会に出たことで、日本全国のいろいろな技能を持った人たちに会うことができた。それが自分にとって一番の収穫だったと思います。いろいろな才能の人と関わり合っていく中で、自分にしか作れない庭を作っていきたいですね。」

石井氏の庭作りはまだまだ始まったばかりだ。